

た。



でず。

カミヨの時代の長
寿は、別格と考えるほ
どです。

長寿は参考になると思います。

[illegible]

東国巡幸をなさいました。

38、トシロのミ クマソうつ アヤ

十二代 景行天皇 三分割の上の後半

38・51 ラシロワケ（景行）のスヘラギは、なお、ツクシ（九州）の全土に安定を齎（もた）す為に、6年の間（景行12年から17年まで）タカヤのミヤ（西都市都於郡、黒貫寺の近く。すゝい竹藪になっていました。近くには塩水の冷泉があります。鹿野田神社（かのだ神社）西都市大字鹿野田）におわしますのですでした。

ミハカセヒメをウチサマ【1例のみ、詳細は未詳、ウチキサキに準じるか】になさいまして、トヨクニワケのミコ（皇子）を儲けられました。母子ともに、ツクシに留まってクニツコとなります。

38・52 17年（アスス804年）のヤヨヒ（3月）11日に、コユカタのニモノ（西都原古墳のところ）にミユキなさいます。東には妻神社が位置しています。スヘラギは、キ（東）を臨み見られて昔の歴史を省みて仰しゃいます。

38・53 「ミラヤアマキミ（10代ニキネ）は、ツクシの農業改善に尽力なさった後に、タカチホのミネ（霧島山）にお登りになりました。そしてカミアガリ（崩御）なさいました。

ミツルナヅ ③ タカチネにてカミアガリです。ニニキネさまの崩御なさいましたところは、霧島山です。天降ったと言うのは漢字文献の誤訳です。霧島山は崩御地だったのです。トヨケノリであったのかどうか？ については、不明です。

『古事記』も『日本書紀』もひどいものです。高千穂峡の方も後世の仮託のインチキ伝説です。

近世の3大仮託、東の金華山、中の実名山、西の高千穂峡。

ヒノヤマ（富士山）の朝日に向かって、おキサキさんのコノハナサクヤヒメのご墓所に向き合う形です。カミ・シモ（カモ）を恵むカミ（先祖）と成られましたのです。主祭しているワケイカツチのミヤ（京都、上賀茂）のクニの名も此れに因んで、「カモ」と呼ばれました。

「カ」と言いますのはカミ（祖先）の遍く照らすです。「モ」はシモのアオヒトクサ（国民）を恵まんなさいますことです。ナルカミ（雷雨）の雨の程の良いようにと、火と水とを別けて祭ってコントロールすれば、ミソロの池などもあって、穀物の収穫は豊かになります。タミ（国民）を賑わせるイサオシ（功績）こそは、カモ・ワケツチ（ニニキネ）の力ンコロなのです

38・56 1つのように、思い召されてカミマツリ（ニニキネさんをお祭り）をなさいますのです。そして、ミヤコ（空）をナカム（眺む・詠む）みウタをお詠みになりました。

⑩ 丹木由丹 今木又田の由由 はしきよし わきへのかたゆ

山母凡由由 山母の由由由田 くもいたち くもはやまこの

山由田由由 由由由田山山の くのにまほ またたなひくは

○山山山 由由由田由由由 あおかきの やまもこもれる

母丹史の 八田糸田や母

やましろは いのちのまぞよ

求平川云の 苧苧田田母

けむひせは たたみこおもえ

小田母や田 丹ぬの丹田き田

くのやまの しらかしがゑお(を)

△△田母云田田田

うすにさせこのこ



シラカシの新芽はしつとりツヤツヤとして美しいです。「このようにウス(髻華、アクセサリー)に付けたのでしょうか。どうしてシラカシの枝が重んじられるのか、不思議です。タケヒト(神武天皇)キミのミヤコに定められたカシハラと、シラカシ、共にフシテ文字の意味で考えると解答が出てきそうです。「カシはカミのあまねくてらす」の感覚と同一線上の事と言えますでしょう。

38-58 18年(アスス805年)のヤヨビ(3月)にミヤコへの帰路の方々、ツクシの南から西側をミユキになられます。ヒナモリのイワセガワ(都城市)に至りますと、遙か向こうに人群れがありました。オト・ヒナモリに仔細を調べに行ってもらいました。オト・ヒナモリが戻って報告します。

「モロのアガタのヌシや人達がオオミケ(ご馳走)を捧げようとして、イツミメのヤ(屋敷)にて集まってる用意です」

フシロワケさんたち一行は、歓待されたのでした。

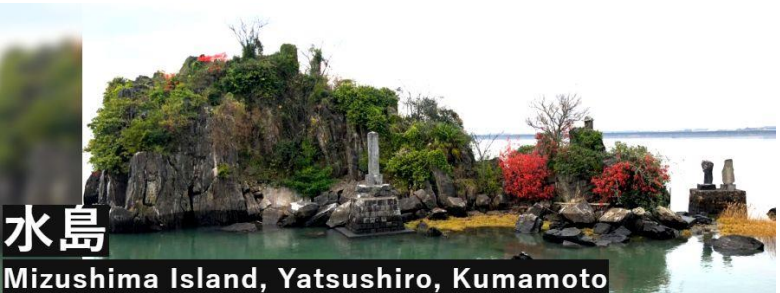
38-60 ウツキ(4月)3日にクマノカタ(球磨郡のあたり、人吉市)に至ります。オサ(長)のクマツヒコの兄弟を召します。ですが、エ(兄)は詣で来ましたが、ト(弟)は来ませんでした。そこで、トミ(フシロワケさんのトミ)とアニ(エ・クマツヒコ)とに諭させることにしました。ですが、頑なに弟のクマツヒコは来ません。そこで、殺さしめたのでした。

38-61 ウツキ(4月)20日に、球磨川の下流のアシキタ(八代市芦北)に至ります。アシキタのコジマにて日照りに暑かったので水を乞われます。ヤマへのコヒタリは水が無かったので、アメに祈りました。すると、岩角に清水が湧き出ました。不思議な小島です。球磨川の河口近くの小島に、清水が湧き出ているのです。後の時代の『万葉集』にも何首も詠まれています。コヒタリがこの水を捧げましたところ、フシロワケさんはそのコジマをミツシマ(水島)と命名なさいました。

38-63 サツキ(5月)1日に船を走らせてヤツシロの湾の中へ入りました。日が暮れてしまい、行き着くべき岸辺がどっちなのか判らなくなりました。フシロワケさんはおっしゃいます。

「火の光るとこへ指せ」

ミコトノリのままに行きます。岸に上がることが出来ました。問いま



水島

Mizushima Island, Yatsushiro, Kumamoto

「ヤツシロのトヨムラ」(今の八代市のところ)と答えがありました。そこで、さらに尋ねます。

「焚く火は何か?」

それには、

「又シ居らず。ヒトの火ならず」

と答えます。そこで、ヲシロフケさんは「シラヌヒのクニ」とお名付けになりました。

^{38・6・5} セミナ(6月)3日にタカクのアガタ(長崎県の諫早市・島原市のあたり)からの船渡しです。タマキナムラ(熊本県の玉名市のあたり)に渡海なさってツチクモのツツラを殺して進みます。

^{38・6・6} 16日にはアソクニ(熊本県の阿蘇市)に至ります。ヨモ(四方)が広くて家居が見えないのでした。ヲシロフケさんが「ヒトありや?」とおっしゃいますと、二人のカミ(指導者)が現れます。

「アソツヒコとアソツヒメでございます。キミよ「ヒト無きや」とは」

と言って現れました。ヲシロフケさんが「尋ねます。

「だれぞ」

アソツヒコは答えます。

「ヤシロはやぶれて(壊れて)しまいました」(2016年にも熊本地震)

ヲシロフケさんがミコトノリして、ヤシロを再建することになりました。今の阿蘇神社・国造神社につながる。カミ(アソツヒコ及びその先祖さん、また、ニニキネさんや、もつと遡ってのイサナギ・イサナミさま、さらには、アメ・カカミカミ(ホ2・23)などなど)が守る事になり家居は繁るようになってゆきます。

^{38・6・8} アフミ(7月)4日にツクシ(筑紫)のチノチのタカタミヤ(三池郡、大牟田市のあたり)にてオホミケと言う大樹が倒れました。樹の長さは970タケ(丈)でした。人々は踏み行きつつ歌うのでした。

○母丹母田 丹末田母口⑩丹 あさしもの ミケのさおはし

母又卒母丹 丹母口母ぬ母 マヘツキミ いやわたらすも

丹末田母口⑩丹 ミケのさおはし

キミが問いますと、ヲキナが答えます。

「樹はクヌキで御座います。倒れぬ前には朝日の陰はキシマネ(キシマ峰、杵島郡武雄市)にありました。夕日陰はアソヤマ(阿蘇山)を覆うのでした。カミのミケ(大木の意味)と言って呼ばれています」

そこで、

「クニの名もミケと名付けよう」(三池の地名)

と、ヲシロフケさんはミコトノリをおっしゃいますのでした。

ミツルナデ

③ これは、石炭の事であります。既に発見はされていたのですね。石炭の事。産業にと活かすようになるのは、明治になってからの事でした。

38・71 ヤツメを越えてマエヤマのアワミサキ（八女市・筑後市のあたり）をご覧になられたヲシロワケさんはおっしゃいます。

「ただみ、うるわし。カミ（指導者）ありや？」

ミヌサルヲウミ【人名か？】が申します。

「ヤツメヒメカミがミネにあり」（八女の地名）

38・73 ホツミ（8月）にイクハムラ（福岡県浮羽郡、うきは市）に至ります。村の又シ達が歓迎のミケ（食事）を差し上げる日にカシハテ・へ（後の善部・大善部）がミサラ（皿）を忘れたのでした。イクハムラのオサ（長）が申し上げます。

「昔、アメミコ（ニキネさん）のミカリ（行幸）の日に、此処にてミケを為したのでしたが、カシハテ（後の善部・大善部）がウクハを忘れた事がありまして、ウクハムラと呼ばれます。クニ・コトハ（方言）でミサラを此処ではウクハとかヰハと言います。（再びの皿忘れの出来事は）何とも目出度いタメシ（故事）で御座います」

38・75 19年（アスス806年）ナカ（ナガツキ、ナカツキ、9月）8日に、ヲシロワケさん（景行天皇）はマキムキのミヤにお戻りになりました。このとき99歳。

38・75 20年（アスス807年）のサミエ（27）のキサラキ（2月）4日に、ヰモノヒメ（クスコ）をイセのカミ（伊勢神宮）にお祭りに赴かせます。（ヰモノヒメは、カマハタトへのミコのイワツクワケの娘さんです）ツクシの乱を平定したご報告とお礼です。ヤマトヒメは108歳にて、ヰモノヒメの到着をお喜びでした。（ヤマトヒメは、イクメのキミ（垂仁天皇）のキサキのカクヤヒメのヒメミコです）ヤマトヒメはおっしゃいます。

「ヨハイ（年齢）がもはや至ってきました、まさに、私は老いました。我がヤソモノへ（80の職掌）とソフ（12）の司をヰモノヒメに移して仕えしめましょう」

3代目になるミツエシロとしての代替わりの出来事でした。ヰモノヒメさんがお就（つ）きになります。クスコ（ヰモノヒメ）をカミ（アマテルカミ）のミツエシロとなさいました。タケのミヤヰ（明和町斎宮）にてつつしみて仕えてはんへる（侍る）ヰモノヒメさんです。ミツエシロは、これで3代になります。初代がトヨスキヒメさんです。2代目は、有名な、ヤマトヒメさんです。そして、3代目にヰモノヒメさんがミツエシロになられます。

38・78 2代目のヤマトヒメさんは引退なさいまして、ウチ・ハタトノイソミヤ（伊勢市磯町）をお開きになります。そして、シツカ（静か）にヒのカミ（アマテルカミ）をお祭りなさいます。引退しても、なお、お勤めなさいますので御座います。

ミツルナデ
③ のちにヤマトタケさんが訪ねて来ます。東征に出立する報告です。ヤマトヒメはムラクモのツルギとヒミツのハラヒのフミを授けるのでした。 さて？ ヤマトヒメさまは、どなたから授かったのでしょうか？

38・79 25年（アスス812年）のフミ（7月）1日に、タケウチマロ（タケウチ）にホツマのシルへ（調るべ）のミコトノリが出されます。東北・関東の状況を視察する使者がタケウチの役目です。タケウチは、8代スヘラギのクニクル（孝元天皇）とイカシコメとの間に生まれたオシマコトの孫にあたります。

38・79 タケウチは、北から巡りました。ツカル（津軽）からヒタカミに、そしてカクのヤ

カタ（神奈川県厚木市小野、小野神社）にと巡りました。

カクのヤカタで、当主のカク・モトヒコにクニシル（古い歴史）のミチ（古い時代の道理、物語）を聞きます。モトヒコが教えてくれましたのは、クニシルのミチのひとつとしての「カミノリ・カサのアヤ」でした。

・

・

3880

カミ・ノリ・カサのアヤ

（祖先祭りの粥のアヤ）

ネのクニのオホギ（6代タカミムスヒ、タカキネ、タカギ）の祭るカミ（祖先）へのお供えのミケの事は次のようでした。（トヨケカミの後継者のタカギさんは、故あってネノクニを妻のシラヤマヒメ（イサナギさんの姉（あるいは妹））と共に治めました。そのタカギさんの祖先祭りのミケの内容です）

ネ・シモ（ネの月、霜の月、11月）の末の弓張り月（半月、23日）にお祭りするカミ・ノリ・カサは、クロマメと、ウムギ（貝か？）と、スメ（小豆か？）と、ナナのヨネ（七種類の穀物？ 7升？）です。カサ（粥）に炊（かし）ぎまして、ウケミタマとサ・ハシラ（5柱）を祭ります。（後の霜月粥と呼ばれます）

年越え（節分）は、ウムギ（貝か？）と、スメ（小豆か？）と、ヨネ（お米）ムマス（6升）で炊（かし）ぎます。トシノリのヤマサカミ（キツラサネ、アミヤシナウと、ウツロサなどの8神）を祭り、オニ・ヤラサ（鬼払い）をします。

ミツルナ

③ オニとは、「二のころ」が固まってしまった。そういう状態を言うのでありましょう。

ムツキ（1月）のナアサ（7日の朝）には、ナナクサのミノ（七草の粥）をお供えて、サクラ（遠い先祖、二のころの5クラ）を祭ります。

ムツキ（1月）のモチ（15日）の朝には、ムワタ・マツリ（近い先祖、内臓器のまつり）のヨネ（お米）とスメ（小豆か？）のカサ（粥）をお供えます。

ツチギミ（サルタヒコ）のシムのマツリ（為し行く力の祭り）は、栄えゆく芽としてサカメの七種類の草の新芽を、ヨネ（お米）と炊（かし）ぎます。アマ（天地開闢の以来の）コ（9神）のカミからの伝統のミシル・カサ（身を為し来たりての事を、実現させ・知る、粥）です。ミ（実、身体、生じて来ること）を知るためのワサ（業、行事）です。

これらを、イクサワ（幾久しく永遠）にして、年長らえてこそを喜びの、ミチのしるべと

ミツルナ

③ このようにありますフミが「カミ・ノリ・カサのアヤ」です。カク・モトヒコから習って、世々に伝える事になったタケウチは、自分自身も遂に長らい得る（長寿）のミチを得たのでした。

・

ミツルナ

ネ・二のころ（本音の二のころ）を、明かして帰ってきたタケウチはラシロワケさんに報告します。27年（アスス814年）のキ（キサラギ、2月）13日の事でした。

アスス778年から行ったタシマモリの時とは世相が様変わりしていました。

「ヒタカミは、メヲ（女・男）の子もカミ（昔の風習）のアケマキ（髪を上げ巻くヘアースタイル、総角）にしています。身をアヤトリ（彩色の装飾をする）して、イサミ（我こそは、朝廷何するものぞと、と勇み。）立っています。

これは、すでに問題だと思えます。アミシ（上を上とも思わない、見にくい。醜い）の人達と呼ぶとふさわしいようです。

そこは、クニ（国情）も良いようです。伝統の歴史を考えましたらば、ミツホ（租税）を出しても当然だと思えます。ですが、頑（かたく）なに、断じて奉（まつろ）わないのでしたら、トル（平定する）のも然るべきことで御座いますよ」

さて、ヒタカミの方はそのような事でした。国家建国の時代にさかのぼって考えた場合、かたくなな態度は、問題です。何故ならば、諸外国からの侵略が目の当たりにも迫りつつある、そういった、国際情勢が、のんきなままの我が国国内の事情を許容してはくれないのです。

一方、ツクシ（九州）では、クマソがまた叛（そむ）いたとの報告がミヤコに到着しました。東も西も、大変な状況に陥りつつありました。

27年（アスス814年）のカナツキ（10月）13日に、ヲシロワケさんはミコトノリを出されまして、コウス（ヤマトタケ）ミコに討たしめられることになさいます。コウスミコは申し上げます。

「良き中テ（イテ・射手）をあらは連れんと」
侍る人達は言います。

「ミノのオトヒコが秀でていると評判です」

そこで、カツラキのミヤト【人名か？ 詳細は未詳】を遣わして召します。すると、オトヒコは、イシウラと、ヨコタテ、タコ中ナキ、チチがイナキを引き連れてミヤコに上って来ました。

シハス（12月）に、コウスのミコは出発します。

さて、クマソの境（宮崎県西都市妻、都万神社の付近）に到着しまして、様子を伺いまして、クマソタケルと自称もしているトリイシカヤ達は川上の要の所に要塞を築いていました。タケルのヤカラ（暴力に長けた人々）が群れ寄りまして、もう、勝ち誇ったかのような雰囲気でした。若いひよっこ何んかが来ても今度はそうはゆかない。と。慢心で安心してきた、トリイシカヤ達でした。もう、大宴会の準備に忙しい有様でした。

コウスキミは決死の覚悟で、若い乙女の姿に女装をしてツルギを隠し持って、宴会にひとり潜入します。ツルギを隠しているのが知れると、たちまち捕らえられてしまいました。決死の潜入です。コウスキミ（ヤマトタケ）は、宴会に行く乙女たちの群れに紛れます。お肌も若々しい26歳のコウスミコは何とか上手く紛れて、ハナムシロ（宴会場）に入りました。盛大な宴会も夜更けになって、クマソタケルたちは酔いつぶれて眠りました。コウスキミは、隠し持っていたツルギを取り出して、トリイシカヤ（クマソ・タケル）の胸に刺し通しました。

クマソタケル（トリイシカヤ）が言います。

「今しばし、ツルギを止めよ。コト（話）あり」

コウスキミが、待ちますとタケルが続けます。

「ナンチ（汝）はたれひとそ（誰、何方なのか？）」

コウスキミが答えます。

「スハラギの子のコウスなり」

タケルが言います。

「我は、これまでクニ（国中）のツワモノ（力の強い者）もモロヒト（諸人）も、我には過ぎずであって、すべて、従わない者は無かったのです。キミの如くの者あらず。

ヤツコ（自分を言う、謙（へりくだ）った言い方）が捧ぐ名を召すや？」

コウスキミが頷きますと、トリイシカヤ（タケル）が言います。

38・96 「今よりは、ヤマトタケとぞ、名乗らせ（給え）」

と、言いつつトリイシカヤ（タケル）は亡くなりました。

自陣に戻ったヤマトタケ（コウスキミ）は、ミノのオトヒコを使わして、トリイシカヤ（クマソタケル）の残党を討ち収めさせました。

38・97 ツクシからの帰路の途上で、アナト（吉備か？ 下関か？）と、キヒ（吉備）にて海賊行為を働く者達を成敗なさいます。また、ナミハ（大阪）のカシハ（淀川の河口付近か？ 柏原市付近か？）での悪党たちも成敗なさいます。

38・98 ヤマトタケさんは、28年のキサラ（2月）1日に、マキムキのミヤコに帰ります。ヤマトタケさん27歳。そして、ヲシロフケさんに申し上げます。

「スヘラギのミタマに抛りてクマソらを、ひた（ひたぶる）に殺してフツク（悉く）ムケ（平定して）ました。ニシ（西）は事無く収まりました。

ただ、キヒ（吉備）のアナトと、ナミハ（大阪）のカシハのあたりに、悪しきイキ吹き道行くもワサワヒ（災い）を求むアフレモノ（あぶれ者）が居まして、これもムケ（平定）しました。ウミ（海路）と、クカ（陸の路）との道を開いて参りました」

時に、ヲシロフケ（景行天皇）さんはクニムケのイサオシ（功績）をお褒めになられて賜物を、ヤマトタケさんにお授けになりますのでした。